



自然の中に残る 「庚申塚」巡り

神社仏閣の境内や、街のあちこちにある庚申塚。武西や浦部、笠神、松虫など10カ所をシルバー夫婦で巡りました。中でも「武西の百庚申塚」は市の指定文化財に指定されており、その案内板には「庚申信仰は、人間の体内に棲みつく三戸^{さんしほ}という「虫」が庚申の夜に抜け出し、その人の悪行を天帝^{てんてい}に告げるといふもので、それを避けるため、その夜は村人が集まって寝ずに過ごす「庚申講^{こうしんこう}」が行なわれた」とありました。庚申とは訓読みで「かのえさる」。干支の組み合わせの一つで、60日ごとに巡ってきます。庚申講は、江戸時代以降に民衆の間に浸透し、健康や長寿などの願いを込めて庚申塔が建てられるようになったようです。庚申塔には庚申の「申」から「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿や庚申の本尊と言われる「青面金剛^{しょうめんこんこう}」、文字のみが彫られているものなど種類も多くありました。印西市は、



で本尊の青面金剛像(笠神)

都市化や生活環境の向上発展により住みやすくなりましたが、豊かな自然の中に残る名所旧跡を巡り、市の魅力を再発見してみたいはいかがでしょうか。



朱色に塗られた庚申塔(浦部)



広報レポーター

田中 謙一郎 (小林浅間)



鳥見神社境内に佇む庚申塚(小倉)